

back

喜多流能楽師 大島 衣恵さん=福山市

第7部 古典芸能の世界

①



忘れられない舞台がある。一九九四年に祖父が傘寿記念で舞った「伯母

捨」だ。有名な唄捨て山の話だが、祖父の演じる老女は月の精のように神々しかった。舞も極めて

ゆつくり。時には座ったまま動かない場面も。しかしその姿からは人間の深みと情愛がにじみ出ていて、大きな感動があった。「能を究めた人は動か

ないで感動を与えることができる。内面がいかに充実しているかで舞台の密度も変わってくる」。人生の積み重ねが存在感として出る。それは自分さくらけだず危険性もは

のようなシテ(主役)方になりたかったが、思わぬ壁があった。喜多流四百年の歴史の中で女性のシテ方は一人もおらず、育てる方針もなかった。それでも能をあきら

# 追い続ける無心の境地

## 亡き祖父の深み目指す

らむが、やりがいでもある。2歳で初舞台

けいこに助む大島さん。「ワキ方や囃子方と緊張感を持ちながら一体になるのが充実感であり、醍醐味(たいごみ)」=福山市光南町の喜多流大島能楽堂 (撮影・天島智則)

喜多流大島家に四人きょうだいの長女として生まれ、二歳の時に子方として初舞台を踏んだ。自宅には、七一年に祖父が建てた全国的にも珍しい個人の能楽堂があった。能は常に身近な存在だった。当然のよき祖父や父

める気持ちにはなれず、東京芸大では小鼓を専攻、囃子方を目指した。「あえて断念する必要はない」と意志が固まっていたのは在学中。他流派で女性のシテが活躍しているのが励みになった。卒業後、実家に戻り、祖父と父のことで本格的に修

う。けいこ場に入ると気持ちが引き締まる。きりりと表情を引き締める。ゆつたりと足を連る。囃を持近づけて候を受け、悲しみを表現する。「能は抽象画に似ている。具体的につくり込まないからこそ、見る人によって想像の余地を与え、時間

と空間を超えた舞台を見せることができる。そこに世阿弥の考えた仕掛けがあり、嫌と云えないテーマがあるように思う。」「型をものに」二〇〇四年に亡くなった祖父は、能に対して熱かった。一方、父はひょうひょうとしていて気負いが無い。性格は違っても、舞う姿から感じるのはやはり年齢が刻む深みである。今の課題は、型を完全に自分のものにする。動作だけでなく、曲を含めたすべてを体に染みこませ、体がおのずと動くころまで持つてゆくことだ。そして突き詰めた先には、祖父がそうであったように、「無心の境地」があるような気がしている。

おしま きぬえ 1974年

福山市生まれ。東京芸大邦楽科卒。祖父大島久見さん、父政允さんに師事し、98年、喜多流で初の女性シテ方となる。国内外で活動。能の普及にも取り組む。比治山大客員教授、広島大らでも非常勤講師を務める。

### 抽象画に類似

父の指導が今後も継続すること、活動の舞台があることという条件に加え、実績とやる気が評価されて晴れてシテ方になったのは九八年。主役と

想像の余地を与え、時間

祖父はよく、自身の師匠である十四世家喜多六平太の言葉を繰り返しては、「能が動かぬえよ」。その口癖を思い出しながら、一生をかけて無心の境地にたどり着くと、けいこを重ねている。(里田明美)